「景観回復のシナリオ」山口県景観アドバイザー 沼田 登

山口に豊かにあると思っていた美しい景観、身近にあった小川のせせらぎも、古い木造家屋の家並みも、石垣の組まれた田園風景もいつの間にか、レアな存在となっている。十年も前から一般の人の景観への関心を高め、景観についての論議を繰り返す活動を行ってきた。昨年はついに法整備もされ、景観が日の目を浴びる時期到来とほくそ笑んでいたが、人々の景観への関心が急激に高まったとはとうてい思えない状況である。

景観だけでは人は寄ってこないなと思っていたころ、自分の好きな自然景観が、さまざまな食べ物に関連していることに気づいた。一面黄金色に実った稲のある里山の姿も、牛の遊ぶ広々とした草原にも、ヤマメの潜む深山の渓流にも食の要素が景観に含まれている。

「五感で感じる景観」をテーマに論議していたころ机上ではどうしてもピンと来なかった味覚。美しい景観を形成する食関連の自然景観は、そこで収穫されるものと景観を同時に味わうことにより、味覚に景観の記憶を刷り込ませることができるし、その景観を育てることにも繋がると思っていた。

そして、昨年１０月に萩で開催された日仏景観会議でソルボンヌ大学学長ジャン・ロベール・ピット氏のフランス産景観関連食品（ワインに生ハムにアンチョビなど）についてのくどいほどの講演を聴いて、いま考えている「おいしい景観」に景観回復の経済的側面が機能することを確信した。

「おいしいと」という誰もが関心を寄せる言葉と「景観」を結びつけることによって、景観回復のシナリオが描けるのではと思っている。